

## BAND : THE STREET BEATS

THE STREET BEATS のヴォーカル ØKI は、'88 年のデビューから常に突っ張ることで自分の立ち位置を必死に築いてきた。それが WILD ON THE WILDSIDE TOUR'92-'93 では変わってきた。ØKI が一人でバンドを背負っている部分がなくなってきて、THE STREET BEATS がみんなを包み込むような感じになってきた。

内容も怒りからかなしみ、そして様々な感情が昇華して優しさや暖かみをみせた。その優しさが、何でも良しとするただの優柔不断なものでは決してないからたまらなかった。

デビューから'92年に発売された『風の街の天使』までの4年間は刃の上に乗っていた状況というか、ØKI が THE STREET BEATS を取り巻く状況と凄く闘ってきた過程があった。

そのことは本人もライナーノーツに記している。

「'89年の夏頃から'90年の初頭にかけて俺たちはいくつものトラブルにつきまとわれた。膨らみすぎた人間関係の歪み、利害、マネージメントとのトラブル、リズム隊の脱退…」

『BEATNICK ROCKER』ライナーノーツより

一時はテレビやラジオ、音楽誌などの広告とかにもいっさいどこにも出さずお金がない状況におかれていた。

それが歌詞やサウンド、LIVE の緊迫感や痩せこけた頬を強調する ØKI の顔つきや表情などにも色濃く出ていた。

明らかにステージに登ってきて欲しくない状況で FAN がダイブしてきた時の一瞬にして刻まれる深い眉間のシワ。

立てかけてあったギターが倒れた時のスタッフに向けられる鋭い目つき。自分の過ちも他人の過ちも許さないようなキツさがあった。それを知っているだけに ØKI が歌詞を間違えただけで、FAN の方がオロオロしてシーンと静まりかえった。

あの緊張は忘れられない。

そんな緊迫感や若者特有のメッセージに魅せられ LIVE の度に足を運んだ。

'94年に発売された『ワイルドサイドの友へ』で THE STREET BEATS は一気に大人への階段を駆け上った。

同じ視線で歌っていたと思い込んでいた FAN は急においてきぼりをくらった。それは信じていたものに裏切られた感じに似ていた。THE STREET BEATS に若者の代弁者の姿を求めていたもの。拳を上げ、ダイブする LIVE を期待してた人は離れていたのではないか。実際ライブハウスの客が減った。

激しさを求めていたものには、物足りなさを残した。

いつもひとりよがり すねてばかりいるんだな  
誰からも愛されない なんていうつもりかい  
親も友達すらも信じられず憎いのか  
すべてまわりのせいで 君だけいつも正しい  
甘えるなよそんな奴に誰が  
優しく笑いかけてくれるはずもない

「愛こそはすべて？」

歌詞に客観的な視線。それは大人の余裕にすらみえた。金髪で眉毛がなく、革ジャン着て眉間にシワよせている人が愛?! 一番愛に背を向けてきたと思っていた男の歌詞に面食らった。

何かが変わる兆しが見えた。

今思えば『ワイルドサイドの友へ』で大人になったというのではなく、それが出来る状況になったという事だったのかもしれない。

THE STREET BEATS がデビューしたバンドブームの最盛期。J(S)W は「全部このままで」と歌い、THE BLUE HEARTS は「終わらない歌を歌おう」と歌いヒーローぶりが届けられていた。

その現象は今でいうモンゴル 800 や 175R のようなものであろう。どんな時代も自我の葛藤を歌う似た系譜のバンドは出てくる。いつの時代もその作品自体の評価よりも、ブームとして片づけられてしまうのは、前出のバンドの作品が 10 代~20 代前半ならではの産物であるからではないだろうか？

若者の代弁者は本人が若者という時代を過ぎると自己の葛藤を追求することをやめてしまう。

歳を重ねるごとに J(S)W や THE BLUE HEARTS を聴かなくなったのは、歌に深まりを感じず、聴く方が大人になってし

まい、説得力がなくなってきたからだろう。

THE STREET BEATS の歌が時代の産物ではなく、時代に左右されず、今でも聴く者の生きる指針や心の支えになっているのは、自分との闘いを現役でしているからだろう。

バブルの最盛期、バンドブームの最盛期にメジャーを降りるという奇特に思える行動もそんな ØKI ゆえの決断だったのだろう。それは、いいとか悪いとかの次元ではなく、自分の生き方と周りの大人達の方向づけ(スタイル)への異議申し立てだった。当時他のバンドとメディアでは同じ括りで扱われていたけれど、どうやら違うことだったらしい。

ØKI の自分自身の心の奥底に向き合う姿勢は、聴くものを自分自身と向き合わせる力がある。

ファーストシングルに収められている「NAKED HEART」や「サンクチュアリ」で歌われている内容は、汚れた社会を見据え、それにまみれなければ生きていけない現実を受け入れ、自分の中に残る真っ白な魂(サンクチュアリ)に望みをかける ØKI の意思表示だったのだ。

「もしこの俺が、すべての事に疑問や怒り、喜びや切なさ、理想…何の感情も持てなくなる限り、俺の歌が終わりを迎えることはないだろう」

『BEATNICK ROCKER』ライナーノーツよりと記しているように ØKI の信念は、若さの特権的なものではない。

**2003 年秋 NAKED HEART NEVER DIE TOUR**  
**11.12 CLUBGIO 市川**

この日はツアータイトルでもあり、デビュー曲でもある「NAKED HEART」で始まった。曲が進み「久しぶりの曲」といって「HUMAN DOLL」になった。

さびついた街は いつも空回り  
行き先のない パレードが続いてる  
おもちゃ箱を溢れた ブリキの兵隊のよう  
同じ様な顔をして 救いだけを待っている

ぜんまいじかけの 笑えない時代  
許され続ける 日々が続くなら  
人は誰も壊れた人形になっちゃう  
HUMAN DOLL 踊り続ける HUMAN DOLL

「HUMAN DOLL」

という歌詞に音楽の世界にいた自分が「え?!」って現実に引き戻された。

ØKI は曲を作った 10 代の時に気づいていたのだ。モラトリアムではいけないことを。このことを 10 代でわかっていた ØKI の眼力に今更ながら、恐れ入りましたと平伏してしまった。

デビューアルバムに収録されていた「HUMAN DOLL」を聴いたときは何とも思っていなかった。すなわち聴き手側に聴き取る力が備わっていなかったのだ。

THE STREET BEATS の前期のアルバムは自我の葛藤を歌った歌が多い。他のバンドと同じ特権の一つとこの曲を意識したことはなかった。

今の教育テレビの「しゃべり場」に出てくるような高校生はこのことを冷めた目でわかっていると思う。でもそれとは種類の違うもの。

ØKI は音楽誌「アリーナ 37°C」89 年 8 月号のインタビューで「できるかどうか分からない。」と前置きしながらも、自分自身の命題として『どこまで「日本語」で「世界」を「表現」していけるかって事なんだ。』と歌詞への思いを語った。

ØKI は常にこの作業に精力を傾けてきた。だから歌詞に力がある。でなきゃ今更ガンと来ることはない。

同じ本を若い時に読むのと歳を重ねて読むのでは、又違う発見がある。THE STREET BEATS の音楽にも同じ楽しみがある。その度に ØKI の希有な存在や凄さ、THE STREET BEATS の音楽のすばらしさに黙らされてしまう。

今回のツアータイトルは“NAKED HEART NEVER DIE”

デビュー 15 周年、来年結成 20 周年を迎える今、敢えてファーストアルバムのタイトルを打ち出してきたのは、ビーツが今も尚、むき出しの魂で勝負している証明でもある。そして今、更にこれを打ち出す事への確信を強めたからに違いない。

デビューから 15 年間活動休止なし。

THE STREET BEATS がツアーの度に必ずスケジュールに入れてきたハコ、CLUBGIO 市川が閉店する。

都心に近いけれど、自分の街に好きなバンドが来てくれることが、ちょっとした優越感でうれしかった。自分の街にお気に入りのバンドが来ると気持ちを解放しに出かけた場所。

都市開発の為 2003 年 12 月 31 日閉店。

\* この文章は 2003 年 12 月 12 日に発行、配布したものです。  
今回 WEB にアップするにあたり、一部加筆修正を加えました。